

荒木寛二作 「ただまことの神のみを」

< 前編 >

中村昭男
息子純一

おーい、純一～、早くここまで泳いでこいよ。
お父さん、年に似合わず、泳ぐの速いんだなあ。(苦しそうな息遣い)おれたち、
プールで泳いでるから、海の波にはどうも弱くて。その点、昔の人はプールな
んかなかったんだもんね。

昭男

久しぶりで泳いだから、どうも調子が出ないなあ。本当はもっと頑張れるはず
なんだが。年には勝てんよ。

ナレーション

中村昭男、56歳。ある電気部品メーカーの部長である。仕事に終われる忙しい
毎日を過ごしているが、今年の夏は、久しぶりで1週間もの休みが取れ、
妻の郁子、高校2年の一人息子純一の親子3人で海に来ている。彼は今、久
しぶりの休みに大いに開放感を味わっていた。

(効果音)

(波の音)

妻郁子

男ども2人とも、なかなか帰ってこないんだから。まだ泳いでるのかしら。あ、
いた！ おーい純一！ あなた～！ 時間よ～！

純一

お母さん呼んでるよ。そろそろ引き上げるか。晩飯は今日もレストラン定食か
…。

昭男

純一、ぜいたく言うな。おれたちの子供のころは、遊びに行く時は、中に梅干
し一つの握り飯だけだったんだぞ。それでもおいしかったなあ、あのころの握り
飯は。

純一

また始まった。父さんの「あのころ、あのころ」が。

ナレーション

こうして、わいわいにぎやかに1週間の夏休みを過ごした中村家の3人は、9
月に入り、またおのおのの日常生活に戻っていった。夫は会社、息子は学校、
そして妻郁子も、塾の英語教師として、生徒たちになかなかの人気だった。こ
の夫婦のそもそもの出会いは、同じ友人を持っていたことがきっかけで、会う
機会があり、互いに、自分の考えをはっきり主張するところに引かれて、結婚
したのであった。昭男は、常に自分に言い聞かせてきたことがある。それは、「物
事を合理的に考え、行う」ということで、多分に彼の少年時代の苦い戦争体
験から来ていた。天皇の名の下に、神国日本は必ず勝つと信じ込まされてき
た価値観が、敗戦を機に180度変わったのである。それ以来彼は、何事も自
分の理性で考えて納得のいくことを、納得の行くやり方で進めてきた。訳も分
からないのに何かに没頭したり、頼ったりすることを彼は極度に嫌っていた。
それが、日本を二度と誤った道に進ませないための生き方だと、自分なりに
確信していたのだ。

郁子 純一、今日は少しは早く帰ってきなさいよ。このところ、部活と塾で夜も遅くなりがちだし、少し疲れているんじゃない？ 顔色が余りよくないわよ。

純一 大丈夫だよ。友達も皆同じように頑張っているし。おれだって負けてはいられないよ。

(効果音) (電話の音)

純一 あ、電話だ。(受話器を取る)もしもし、ああ、お前か。何かあったのか？

ナレーション それは親友の谷口弘だった。

谷口弘 (フィルター音)ああ。実はおやじが、北海道に転勤になったんだ。それでおれたち家族はどうするかって話し合ってるんだ。だから、お前とコンビ組んでいるテニスのほう、話によってはダメになりそうなんだ。悪いけど、そうになったらごめん。

純一 まだ決まったわけじゃないんだろ。気にするなよ。うまくゆくよ。それより受験のほう、どうするんだ？ 一人でも残って目標校を受けるのか？

弘 (フィルター音)それもあってな、親も気にしてるんだ。おれは何とかやるつもりだけどな。それに、お前たちと会えなくなるのも寂しいしな。

郁子 (オフで)純一、時間遅れますよ。

純一 じゃまた学校で話そうよ。そんなに悲観するなよ。皆、一生懸命なんだから、きつとうまくいくよ。おれも頑張るからさ。

ナレーション 中村家の親子3人は、一家の^{あるじ}主、昭男に倣って、妻も息子も自分の目標を持っておのおのの道を進んでいた。2人はどちらも負けず嫌いで、いい意味でのライバルだった。純一は、この“だれにも頼らず、自分だけを信じて突き進む生き方”を父から学んでいたのかもしれない。その点では母の郁子も同じだった。純一は、この“だれにも頼らず、自分だけを信じて突き進む生き方”を父から学んでいたのかもしれない。その点では母の郁子も同じだった。

そんな時、学校で、純一の耳に妙な話が伝わってきた。それは、“純一の身に、恐ろしいことが間もなく起こる”との気味の悪いうわさであった。純一は気にしないでいた。

弘 純一。お前のへんなうわさ、知ってるだろ。おれ、だれがそんなこと言っているのか探してみたら、どうもクラブの後輩の三宅光子らしいんだ。お前、あいつに何か怒らせるようなことしたか？

純一 別に。

ナレーション それから数日後、そのうわさの出どころらしい当の三宅光子が、決まり悪そうに声をかけた。

三宅光子 中村先輩、わたし、謝らなければならぬことがあるんです。先輩に何か悪いことが怒ってといううわさが立ってるでしょう？ 実は...わたしが口を滑らせたんです。わたし、先輩が好きだったから“そんなことになったらどうしよう”と思

うと、もう心配で心配で、つい..。

ナレーション 彼女は、ひそかに思いを寄せていた純一のことを、占い師をしている自分の叔母に、何の気なしに占ってもらったというのである。その占いが、たまたまうわさに立ったような内容で、彼女が親友の女の子に話したのが、たちまち広がったとのことであった。その夜、純一はそのことを父に話した。

父 ふーん。占いのご託宣か。人騒がせな話だな。そう言えば、そんなのが結構はやってるっていうじゃないか。会社の女の子たちも。やれ星占いだ、血液型占いだ、手相で結婚予想をしてもらったと、毎日のようにしゃべってる。何かめの見えんものに取り付かれたり、縛られるってのは、イヤなもんだな。父さんは素直についてゆけん。

ナレーション アナウンサー その時、テレビは天皇の大嘗祭たじょうさいのニュースを伝えていた。今年11月に予定されております天皇の即位に関する準備は、各方面で滞りなく進められています。世界百数十か国よりの代表の参列もあり、この秋は、警備も一段と大規模になります。また、一部過激派が、大胆な行動に出るのではないかと、警備陣は神経を使っています。大嘗祭の神事のため、秋田と大分に植えられていた稲も順調に生育し、間もなく収穫されます。なお、キリスト教を始め、一部宗教団体に、天皇の即位に関する一連の儀式は、憲法に違反するとの強い反対意見があり、問題を抱えたまま、間もなく即位の式を迎えることになりそうです。

昭男 わたしも今ひとつ分からないんだが、いやに仰々しくするもんだなあ。純一、どう思う？

純一 おれもよく分からないけど、この前、社会科の時間に、先生が言っていた。この行事を今のように大掛かりにやるようになったのは、本当は明治からだってさあ。古い古いと言われてるけど、そうでもないらしいよ。

昭男 うん。ところでお母さん、今日は遅いだけど、何か聞いているか？

純一 いや、何も。また生徒たちに質問されて、帰るに帰れないんじゃない？ お母さんも仕事熱心だから。

(効果音) (ドアの開く音)

郁子 ただいま。ああ疲れた。わたしも年ね。どうもこのところ疲れが取れなくて。わたし、お先に失礼して休むわ。

ナレーション 妻郁子は、前々から少し不安なことがあった。彼女の友人に、最近乳がんで手術をした人がいたが、自分もその人から聞いたのと同じ症状を感じていたからである。彼女は、家族には話さず、先日こっそり検査を受けたが、今日、その結果が出て、医者から精密検査が必要だと言われてしまったのだ。郁子は、心の中に不安が徐々に広がっていくのを抑えることができなかったが、それでも自分を励まし、精密検査を受けた。それから数日後のことだった。

(効果音) (電話の音)
木村医師 (フィルター音) ももし、中村昭男さんですね？ お勤め先に突然ご連絡して
申し訳ありません。実は、奥様のことで、至急お知らせしなければならないこ
とがありますので、ご連絡させていただきました。電話では話せませんので、
今日中に病院にお出かけくださいませんか？

昭男 ...はあ。
ナレーション 彼は、事の重大さを直感的に悟ったが、その内容は全く分からなかった。彼
は医師に言われるままに、早めに会社を切り上げ、病院へと直行した。

(効果音) (病院内)
医師 わたしは奥様の担当の木村と申します。突然のご連絡で驚かれたと思いますが
が、事は急ぎますので、こうしておいでいただきました。
実は、奥様が、先日、乳がんの検査に来られましたが、陽性反応が出ました
ので。精密検査をしましたところ、かなり進行している悪性のものだと分かりま
した。まずはご主人にお話しして、今後の手順をご相談しなければと思いまし
て。

(音楽) (ショッキングなブリッジ)
ナレーション 昭男は、医師の言葉を聞きながら、それが自分に語りかけられているのでは
なく、何か遠くで語られているように思えた一方で、もう一人の自分が「落ち
着け。落ち着くんだ」と叫んでいた。家に着くまでのことを、彼はまるで覚えて
いなかった。

(効果音) (ドアの開く音)
昭男 ただいま。純一、お母さんは？
純一 まだ帰ってない。あ、そうだ。電話があって、今日はおばあちゃんのところに寄
ってくるからって言っていたよ。
昭男 そうか、おばあちゃんのところか。
ナレーション 彼は、何もまとまらない頭で、何かを考えようとするが、無駄であった。彼は、
久しく開いたことのない仏壇の戸を開いて、一心に何かを祈ろうとした。しかし、
「妻ががんだ」という思いが心を駆け巡るだけで、何の言葉もなくそこに座り
込んでいた。彼は、自分がいかに弱く、無力な存在であるかを、この時初めて
知った。

純一 お父さん、何かあったの？
昭男 純一、お母さんが...、お母さんが、乳がんなんだ。
純一 え？
ナレーション 純一は、ぼう然と父のそばに立ち尽くした。

< 後編 >

郁子 久しぶりね、お母さんとこんなにゆっくり話したのは、まだ結果通知はないんだけど、わたしの体調からして、何かあるんじゃないかと思うと、不安で不安でしょうがないの。

母 分かるよ、郁子。わたしもね、お父さんがこの前の戦争に連れていかれた時、毎日が本当に不安だったよ。いつ戦死の広報が入るかとね。お前はまだ3歳だったし、わたし一人で家のことも何から何までしなけりゃならなかったからねえ。また戦争も日に日に激しくなり、何となく、「負けるんじゃないか。お父さんはこのまま帰らないんじゃないか」と考え始めると、ますます不安になってね。

郁子 お母さん、そうなときどうしたの？ 何もしなかったの？

母 近くのお宮さんに、夜こっそり行って、よく祈っていたよ。祈っている時はいいんだけど、またすぐ不安になってね。

郁子 わたしもこんな不安になって、何かに頼りたいっていう気持ちが出てきたの。主人と同じで、神頼みなんて金輪際しなかったのに。我ながら変わったなと思うわ。

母 わたしも、お父さんが無事に復員してきた時は、わたしの宮参りが聞かれたと思ったけど、1年もたたず亡くなった時から、すっかり信心の思いが消えてしまったの。そしてね、この年になって、改めて本当に信じられるものが欲しいと思い始めたの。人間って勝手ね。

ナレーション 独り人生のたそがれを迎えている母と、死の恐怖を前に、次々とわき上がる不安におののく娘。二人は今、それぞれに自分の心を見つめていた。そして、この自分をありのままに受け入れてくれる確かな存在を、初めて真剣に求めていた。次の日。

郁子 あなた、昨日は急におばあちゃんのところに泊まっちゃってすみません。しばらく行ってなかったもんだから、会ったらつい話し込んで...。

昭男 いいんだよ。おばあちゃんだって、年も年だし。たまには泊まってあげなきゃ寂しいよ。ところでお前、自分の体の調子を気にしていたが、どう？

郁子 実はわたし、病院で乳がんの検査を受けたの。でも何だか不安で、まだ結果を危機に病院に行っていないの。わたし、どんな結果を聞いても動じないつもりだったんだけど、今は自信なくて。

昭男 そうか。でもそんなに心配しなくてもいいだろう。悪いほうにばかり考えなくてもいいんじゃないかねえ。お医者さんを信頼するしかないよ。

ナレーション 夫として、ぜひ慰めたいと思いながら、話し出すと、医師からの話をうっかりしてしまうのではないかとの思いで、ぎこちない受け答えになってしまう昭男だった。

医師との再度の話し合いの時が近づいてきた。昭男は、妻にどのように話を

持ち出したらいよいよ悩んだ。しかし問題は簡単に解決した。妻のほうから「一緒に医師に会ってくれ」と言い出したのだ。

(効果音)

(病院内)

木村医師

結論から言えば、わたしとしては手術をなさることをお勧めいたします。悪性ではありませんが、ほっとけば危険です。わたしどもも最善を尽くしますので、いかがですか？

昭男

木村先生にお任せしてはどうかね？

郁子

先生、わたし不安なんです。今までこんな気持ちになったことはないので、「おかしいな」と思いながらも、本当に不安なんです。何かに頼りたい。先生を信頼していないんじゃないですが、何でもいから頼りたいんです。

医師

そのお気持ちはよく分かりますよ。わたしも医師を何年もしていますが、大きな手術の時は、いつも不安になります。それでわたしは、手術の前には、神様に祈ることにしています。その祈りを通して平安が与えられて、手術に当たるんです。

郁子

先生もそんなに不安に思われることがあるのですか？ 驚いたわ。神様に祈るとおっしゃいましたけど、先生、クリスチャンでいらっしゃいますか？

医師

ええ。ですからわたしは、聖書に示されている唯一のまことの神様に祈ります。その点、日本人は、人間が片っ端から神様になってしまうので、祈ると言っても、なかなか心から神を信じ切って祈ることができないのではないのでしょうかねえ。

郁子

先生、まことの神様って、まだよく分かりませんが、でも確かにおられるような気がします。その方におすがりしたいんです。先生、どうぞわたしのためにもお祈りしていただいけませんか？

医師

いいですとも。あなたやご主人のためにも祈りますよ。

ナレーション

こうして、郁子は手術を受けた。木村医師の祈りの中で、4 時間にわたって行われた手術の結果は、奇跡としか言いようのない成功であった。

ある日、久しぶりで純一の元に、北海道に引っ越した友人の谷口弘から電話がかかってきた。彼は東京に残るかどうか迷ったあと、家族とともに過ごすことに決め、純一との大学での再会を約して引っ越していったのである。電話の話は、彼の家の隣が教会で、純一の母の病気の知らせを聞くと、何とか治ってもらいたくて、生まれて初めてその教会に飛び込んで、祈ってもらったというのだ。そして、それを機会に、礼拝に出席し始めたとのことであった。思わぬ祈りの支援に純一は感激した。

弘

(フィルター音) ところでさ、この秋に大嘗祭ってやるだろ？ 教会に行ってみて考えさせられたことなんだけど、天皇のことって大きな問題なんだってね。特に、大嘗祭は、人間天皇を神として礼拝することになってしまっただって。しかも国全

体が、天皇を神として認めることになってしまう。こういうのを“偶像礼拝”って
いうんだって。純一、こんなこと、お前聞いたことあるか？

純一 大分前、ニュースで言ったのを聞いたことがあったけど、よく分からなかつ
たよ。そんな意味があったのか。今までおれの身近にクリスチャンがいないか
ら、そんなこと聞くチャンスもなかったけど、母が手術を受けたお医者さん、確
かクリスチャンだったと思うから、チャンスがあったらおれも聞いてみるよ。そ
れにしても、自信家のお前が、教会行き始めたとはな。実はうちでもおふくろ
が、「神様が病気を治してくれたんだから、一度教会に行かなきゃ」と言い出
して、おやじやおれも付き合わされて、この間、その木村先生の行っている教
会に行ってきたんだ。

弘 (フィルター音)「へえ、そうか、なにやらお互い神様づいてきたな(笑い)。
ナレーション そんなことがあってから、純一は迫ってきた大嘗祭のことが、なぜか気になり
出していた。そんなある日、純一たち親子 3 人は、道であるデモの行列に出
会った。

(効果音) (シュプレヒコール口々に)「大嘗祭反対！」「信教の自由を守れ！」「天皇を
神にするな！」

昭男 あれは大嘗祭反対のデモだ。キリスト教のグループかな。

郁子 あれ、木村先生じゃない？ そうよ、確かに先生よ。頭に包帯を巻いて、どうし
ちゃったんでしょう。

純一 きっと右翼に襲われたんだ。それでも参加するなんて、すごいな。傷が軽いと
いいけど。

ナレーション 純一と母郁子は心配になり、木村医師を自宅に見舞いに行った。彼は思いの
ほか元気で、2人の訪問を喜んで迎えてくれた。

郁子 先生、わたしも父を戦争で死なせたようなものですから、天皇には特別な思
いを持っています。確か昭和天皇は戦後、人間宣言をされましたね。もうだれ
も天皇を神様だとは思っていないんじゃないですか？

医師 確かにそうですが、戦前も戦後も、日本人には、人間がすぐに神になってしま
うという考え方が根強くあります。わたしはクリスチャンですから、“神は天地
すべてを創造された方であって、人間は決して神になれない”と信じています。
しかし多くの日本人は、天皇を神と考えることに、何の矛盾も疑問も感じてい
ません。天皇は日本人にとって“内なる偶像”なんです。大嘗祭は、“天皇霊”
という霊を新天皇が得て、不変の神になることを表した儀式ですから、わたし
には受け入れられません。クリスチャンの立場で言うと、偶像礼拝を国全体が
行うことになってしまうからです。

純一 先生、でも信仰は一人一人の自由じゃないですか。天皇家の行事として、ほ
っておけばよいことじゃないんですか？

木村医師 でもね、天皇の場合は、国が国庫の中から何十億という大金を出して行こうし、政治家や公の立場の人々が多数参加するんだ。個人の問題では済まないんだよ。

ナレーション 2人は、木村医師がなぜデモに参加したのかを聞いていくうちに、その問題の奥深さに驚かされ、つい話を続けてしまった。帰宅した2人は、昭男に今日のことを話して聞かせた。

昭男 ふーん。木村先生は、律儀なクリスチャンというか、まじめな方なんだなあ。医者の仕事だけでも大変なのに。こういう生き方をすると、信仰も大変なことだなあ。わたしにはなかなかできそうもないよ。

郁子 律儀って言うより、先生はご自分の信仰をただ心の中の問題としてじゃなくて、日本という国の中で、どう守っていくか、どう表していくかを真剣に考えていらっしゃるんじゃないかしら。

昭男 うん、そのことを突き詰めていくと結局、“何を ”というより“だれを ”信じるか、という問題になるな。わたしたちの世代は、神ならざるものを神と信じ込まされて、ひどい目に遭わされたけど、またぞろ国 を挙げてそんな方向に行きつつあるのを目の当たりにすると、心の中に何かしっかりしたよりどころを持っていないと、とてもダメだという気になってきた。しょせん人間は弱いからな。

ナレーション そういう昭男の言葉に、郁子も、純一も、黙ってうなずいた。今、この親子3人の心は、見えないところである一点に向かって結ばれていた。それは、人に命を与え、人を生かす、唯一のまことの神の存在であった 。

< 完 >